白ひげ相模庵

作:近藤せいけん

1
白ひげ相模庵　道心塾
江戸時代の天保の頃、相模の国の三田村に大吉という、働き者の農民がいた。
母さき、弟りゅう、妹はな、の四人暮らしで、父親は大吉が幼いときに流行り病にかかり、死に、母さきも、病弱で、寝たり、起きたりが続いていた。
大吉が一家の働き手として田畑を守り、野菜を作り、川で魚を取り、町に売りにゆき，生計を立てていた。
天保の時代は、長雨による洪水、冷害が続き、各地で、飢饉者が続出し、一揆（いっき）や、打ちこわしが起き、
天保四年に始まった「天保の大飢饉（だいききん）」は天保十年頃まで続き、暗い時代となっていた。
その頃の相模の国の三田村も長雨による洪水、冷害が続き、日照不足による、米の収穫も例年の三分の一になり、食べる物が少ない毎日だった。
ただ、三田村は、大河相模川、中津川、小鮎川の豊かな川に恵まれ，鮎を、はじめ，鯉、ウグイ、うなぎ等沢山の魚が取れる、川の幸に恵まれ、長雨、日照不足による被害もどうにか乗り切れる土地がらで、恵まれていた。
ある日のこと、大吉は相模川に昨晩、仕掛けておいたうなぎ取りの竹籠を取りに向かいました。
一つ、一つ、竹籠をあげましたが、うなぎは入っていない。
病気の「さき」に、滋養がつく、うなぎを食べさせたいと、このところ、毎朝うなぎ漁に出向いている。
「　今日は、不漁だな、困った」
「　かかに、食べさせる、うなぎがない」
「　しょうがない、今日は大根汁を作って、皆で暖まろう」
「　さて、川の漁は、終わりにして、畑に行こうか」
相模川の川岸を自分の畑に向かって歩き始め、小道の曲がり角の「おじぞうさま」に。
「　おじぞうさま、おじぞうさま、どうか、かかの病気をなおして下さい。お願いいたしますだ」といつものようにお祈りをささげ、畑の見える、畦道に来たときである。

一人の白い、長いヒゲを生やした、年寄りが大きな切株に座っていた。大吉は不思議に思って、年寄りに声をかけた。
「　もし、もし、見慣れぬ人じゃが、そこで何をしてるのじゃ」
「　身体がどこか、悪いのか？」
「　どこの村の者か？」
大吉は立ち止まって、腰をかがめ、年寄りを見つめた。
少し，間が空いてから、静かな、心に染み透るような声で返事が返ってきた。
「　おぬしの、望みは何だ？」
「　え、おらぁ、のことか？」
「え、え～突然、何でそんなこと、聞くんだ」
「　おぬしの事を知っているからだ・・」
「え、え～　白ヒゲのおじいさん、おらぁの事を知っているか？」
「　すべてじゃ」
「　全てじゃと・・・」
「　それじゃ～聞くけど、おれの名はなんという～」
「　ふ、ふ、ふ、三田村の大吉。母、さきと、四人で暮らしている」
「　え！　何で知っているんじゃ？」
「　誰かに聞いたのか？」
「　今日は、川で、うなぎ漁をしたが、一ぴきも上がらなかった。　どうじゃ」
「　母、さきの病気を早く治したいと、いつも、天に祈っている」
「　どうじゃ」
「　うわぁ～たまげた」
「白ひげさん、あんたは何者だ」
天を指指した。
「　仙人様か！」
「　・・・・」
「さて、大吉、おぬしに尋ねる、おぬしは大人になったら何になりたい？」
「　おぬしの望みは何だ・・」
大吉はこの不思議な白しげの年寄りを、天の仙人様と思った。
「　おらぁ、は百姓じゃ、おらぁの、てても、じじーも百姓じゃつた、だから百姓を続けていくしかない」
「　そうか、百姓を、な・・」
「それが、おぬしの望みか？」
少し、間が空いて、
「　本当は、かかの病気を治してあげたい」
「　一家揃って、幸せにくらしたい。食べ物で、苦労をしたくない」
「　この長く続く飢饉で、たくさんの人が死んだ。早く、食べ物で飢える事がないような、実り多い田畑を作りたい。」
「　村人が病で亡くらないようになって欲しい」
「　でも、どうしたら、よいか、おらぁにゃ解らない」
「そうか・・・」
不思議な白しげの年寄りは、じつと、大吉の顔を見つめ、静かな声で語りかけた。

「　それでは、おぬしに良き、運を開いてあげよう」
「　え、本当ですか！」
「　これから、三日後、早朝、西から、お坊様がこの前の道を通る。そのお坊様におたずねしろ。おぬし次第じゃが、運が開かれるかもしれない」
「　うんだ、解った。おらぁ、前の道で待つだ」
「　そうか、それは上々。それじゃ行け、さらばじゃ」
大吉が頭を下げ、頭を上げると、もう、白しげの年寄りは消えていた。
三日が過ぎた。
白しげの年寄りから教わった、畑近くの道で、大吉は「お坊様」待った。
夜が明け、少しづつ、明かるんできた。すると、じゃらん、じゃらんと音が、だんだん、近づいてくるのが感じられた。
「　お坊様がきた」
大吉は地べたに，正座をして、お坊様を待ちかまえた。お坊様に輪郭が見え始めた。
お坊様が大吉に気がつき、立ち止った。
「　ほう、わらべではないか、そこで何をしている」
「　何故、そこに座っている。こんなに早くから」
大吉は頭をあげ、「お坊様」を見つめた。
「　お坊様、お坊様、どうか、お教え下さい！」
「　おらぁ、どう生きたらよいか！」
「　おかあ、弟、妹、の面倒を見て、このままずっと百姓を続けてゆきたいが、おかあ、病気、弟、妹はまだ幼い」
「お米、このところ毎年、不作つづき、畑の作物をダメ」
「　三流の川があるから、どうにか生き延びられる。」
「食べ物がなく、村でも、争いが絶えない、流行（はやり）病まいにかかる者も多く、病人も増えている」
「　どうしたら、よいか解らない・・・」
「　・・・・」

「　おまえの名は何という」
「三田村の大吉といいますじゃ」
「ほ、ほ、ほう、良き名じゃなあ」
「　いくつになる」
「九才になりますじゃ」
「　そうか、それじゃ、大吉、おまえは字が書けるか？」
「　いいや、書けない。本も読めない。」
「　そうか・・・」
「　おまえは、どう生きたらよいか！と拙僧にたずねた」
「　それは、答えを出すのが、難しい」
「　教えたくれないのですか」
「　今のおまえでは、教えても、解らないだろう」
「　え、ダメですか・・」
「　ところで、大吉、おまえは拙僧がこの道を通ることを、どうして、知ったのか？」
「　誰かに、教わったのか」
大吉は三日前の不思議な体験を「お坊様」に話した。
お坊様は静かに、大吉の話を聞いていた。そして、心の中でつぶやいた。
「　ほ～う、何となぁ、やっと、拙僧が探し求めいたものに出会えた」
「　この三十有余年、流浪の旅、やっと、天はお示しあった。ありがたや、ありがたや、」
「安住の地を決めん。この地といたそう。そして、この童に修行して得た全ての知識、経験を教えよう。良かった、ありがたや」
おもむろに、大吉の肩に手を置き、右手でありがたいお経を唱えた。
「　大吉、おまえ自身で、生き方の回答を見つけださねばならない」
「　その手助けは、この拙僧がしょう」
「え、本当ですか！」
「　但し、七年の間、拙僧のもとに一日おきに通い、学問をしなければならない」
「　、七年もですか・・・」
「　わはははは、はは～」
「そうじゃ。七年間じゃ。但し、明るくなってから、村の衆が野良にでるまでの一時でよい」
「　でも、おらぁ、毎日、川の漁、田畑をしなければならない」
「　そこを、工夫せよ」
「よいな。大吉、おまえが決めることじゃ」
「　この先の、荻野村の古いお寺に住まうつもりじゃ。待っておるぞ、大吉」
「　はい・・・」
大吉は考えながら、自宅に帰った。
「大吉、何か考えことか？」
「　う、うん、うん、・・」
「　実は、おかあ、不思議なことがあってさぁ～」と白しげの年寄りの話をし、「お坊様」の話を、皆に話して聞かせた。
母さき、弟りゅう、妹はなも黙って聞いていた。
「　それは、大吉、天のお導きじゃ。有難いことじゃ。ぜひお受けしろ」
「　そうだよ、あんちゃん。おらが、その間は代わりにがんばるから「お坊さん」のところへ通

ってくんろ」
家族みんなが励ましてくれた。
大吉は腹を決めた。
「　早速、明日から、「お坊様」のところにいこう！」
「「お坊様」から学問を教わり、かぁかや、家族の為、村の人の役ににたてるように勉強をしよう」
次の日まだ暗いうちから、「お坊様」のいる荻野の荒れ寺を目指した。
その寺はまるで、廃墟で、とても住める状態ではなかった。
しかし、「お坊様」は平然としてお堂に座り、お経をあげていた。
お経が終わると、大吉の方に振り返り、座り机に手招きし座らせた。
「　大吉、よく来た。おぬしに今日から、読み，書き。学問を教える」
「　まず、この墨をする、よく見ておれ。このように墨をする」
「　次にこの板に文字を書き、覚える。」
「　筆をこのように持つ、なるべく小さい字でなぁ。何回も消して書くからなぁ」
「　さあ、始めるぞ。」
「そ、そ、そう、ゆっくりなぁ」
「　さてと、拙僧の名を書くぞ、道心（どうしん）と読む」
「どうしん様ですか」
「　おまえの名を書くぞ、だいきち。よい名じゃ」
「　さあ、書いてみろ」
「　おお、うまい、うまい。それでよい、それでよい」
僧道心の、大吉に対する、手をとり、足をとりの教えが始まった。
大吉は一日置きに荒れ寺に通い、帰りには、僧道心先生の書いた、手本の巻き紙をもらい、家でも畑でも、毎日、勉強を続けた。
そして、一年が過ぎた。
今では、本読めるようになり、字も書けるようになった。
ある日のこと。
僧道心先生に連れられ、山に入り、薬草を探した。薬草の種を取り、保管をし、また先生が各地を放浪の旅路で収集した薬草の種を、翌年寺の畑にまくのだと、教えられた。
二年が過ぎた。
僧道心先生の指導のもと、先生が集めた、いろんな薬草の種を畑にまいた。
丁寧に畑を耕し、水をやり、薬草の成長を待ち望んだ。
春がゆき、夏が過ぎ。収穫の秋が来た。
「　さぁ、大吉、薬草を刈り取るぞ。種類ごとに、丁寧に扱え」
「　はい、先生。収穫は楽しいですね」
「　そうじゃ、実りとは有難いもの。天の恵みじゃ」
「　刈り取った薬草を天日で干す、しかるのち、鉢を使って、薬を調合する。手順をよく覚えておけ」
「　この薬が出来たら、かか様に煎じて飲ませ。必ず快方に向かうはずじゃ」
「　本当ですか！　先生有難うございます」
「　それから、村人で病気にかかっている者にも、治療しょう」
「　それは、村の衆が喜びましょう」

荒れ寺での薬草による、治療がはじまった。村人は喜び、野菜や、魚、やっと取れたお米を御礼に持参した。
寺を手伝う村人が増えた。
そして、四年が過ぎた。

大吉のかか、さきも、すっかり良くなり、田畑に出て野良仕事が出来るようになった。弟のりゅう、妹のはなも一生懸命、家の仕事に精を出した。
そして、弟のりゅう、妹のはなもお寺の手伝いをするようになり、僧道心先生の教えを受けるようになった。
口伝てに，近郊の村、町の衆にまで広がり、教えを受けたい、人が増えた。
先生は寺小屋を始め、望む者に、読み，書き、そして、学問を教えた。
「道心塾」と命名され、多くの塾生が来るようになった。
また薬草による治療を始め、多くの人々が押し寄せた。
その評判は、荻野山中藩の藩侯、大久保の殿様の耳に入り、士分の者が通っても良い許可、薬草園としてのお墨付きをいただけるまでになった。
大吉も僧道心先生の寺に毎日ゆかれるようになり、学問の習得もずいぶん進み、むずかしい、書物も読みこなせるようになった。
そして、学問所、薬草園の一番弟子となっていた。
ある日のことだった。
その日は遅くまで、病人の看護や、薬草の薬作りで、寺に泊る事になった。
真夜中。表の戸を激しく叩く音で大吉は目を覚ました。
隣の先生の部屋から。
「　大吉、起きているか、ちと、見てまえれ」
「　はぁ、見てまいります」
外の声は慌しく、「　どんどん、どん。　どんどん、どん。」と戸を叩いていた。
手伝いにきている、泊り込みの村の衆が門の戸を開けた。
提灯を下げた町方の商家の番頭風の青白い顔をして立ち、その側には、町籠の若い衆が休んでいた。
「　お願い申しあげます。当家のお嬢様が高い熱が下がらず、呼吸も激しく、苦しんでおります」
「　先生にご診察をお願いいたします。」
「　お取り次を、お取り次を、お願いいたします」
「さあ、どうぞ、お入り下さい。ただ今、先生をお呼びいたします」
すぐに大吉がやってきた。
「厚木町で商ないをいたしております、海産物問屋相模屋の番頭でございます」
「　てまえは、吉太郎と申します。てまえどもの、あるじの一人娘、さち様が、重い病にかかりまして、明日へも知れない重体となっています」
「町の医者にかかっていましたが、一向に良くなりません。
町医者の診察ではあと、数日の命じゃろう。という冷たい言いようでした」
「　今日になって、一段と、熱も高くなり、呼吸も激しく、苦しそうに、なってきました。」
「　どうか、どうか、先生のお力でお嬢様をお救い下さい」
「　先生をお呼びいたしますので、少しお待ち下さい」と大吉が答え、先生を呼びに行った。
すぐに道心先生がきた。
「番頭さん、まず、娘さんの様子じゃが、何時頃から熱が出た。う、ん、うん」と
詳しき聞き取り、大吉にあれこれ、薬の調合を指示した。
「　薬を調合して、あとから，かけつけてくれ。先に行っている」
「　はい、かしこまりました。」

「番頭さん、いくぞ！」
「　へい、有難うございます」
薬箱を持ち、急いで、籠に乗り、厚木町の海産物問屋相模屋に急いだ。相模屋は小田原本店の他、江戸の魚河岸、大阪、四国阿波に支店を持つ大店（おおだな）である。
大吉は指示どうり、薬を調合し、何種類もの薬をつくり・薬箱に入れ、厚木町の相模屋に急いだ
相模屋に着くと、すぐに、娘の寝ている部屋に通された。
すでに、道心先生が娘さんの診察を終え、娘さんの脇で、呼吸を計っていた。
「大吉、薬を出せ。　娘さんを抱き起こせ。」
大吉は抱き起こし、口を開けさせ、薬を入れ、水差しで、流しこむ。
「もう一回。薬を流しこめ、あわてるな。」
頭の額に薬を塗りこんだ湿布を貼り、治療は終わった。
娘さちの、両親、相模屋洋太郎、その江、は心配そうに、枕もとに座り、娘さちを見守り続けた。
「　道心先生、娘は助かりますか・・」
「　先生、どうか、どうか、娘をお助け下さい」と頭を下げ、思わず娘の手を握った。
「　今晩が、山じゃ。もっと、早く見せてくれたら、こんなに悪く、ならなかった。」
「　あとは、娘さんの生きようという力、次第じゃ」
「　拙僧は、明日の患者さんの為、戻る」
「　この大吉を置いておく、きっと、役に立つと思う」
「大吉、あとは頼むぞ」
「はい、かしこまりました。」とやや、緊張して答えた。
にさん、あれこれと注意をして先生は帰った。
大吉は娘の枕もとに座り、脈を計ったり、乾いた頭の湿布を塗り直し，替えた。
朝方、そのに、手つだってもらい、調合した薬を水差しで、流し込んだ。
庭鳥が朝を告げ、白々と明け始めた。
さちの寝息が静かになった。あれだけ高かった熱が引きはじめた。
峠を越えた。
両親はさちの側で、うと、うと、寝ていた。
大吉は一睡もせず、看病し続けた。
さちが目をあけた。口を開いた。
「　あなたはだあれ？　どこの人・・・」
その声で、両親が目を覚ました。
「　さち、さち～助かった！　助かった・・・」
洋太郎、その江の目に涙が光っていた。
「　有難うございます。有難うございます。先生方は娘の命の恩人です」
さちはじっと大吉を見つめていた。
大吉はさちに話かけた。
「　まだ、まだ、寝ていないと、いけませんよ」
「　毎日、ここにあります薬をきちんと、飲んで下さい」
「薬は、当分、私がお届けいたします。様子を見させていただきにあがります」
「さあ、それでは、治療所の仕事がありますので、これで帰ります」
先生、少々、お待ちを。ただいまお籠を呼びます。

暫時、お休み下さい。
相模屋洋太郎、さちとの運命的、出会いであった。

五年が過ぎた。
大吉は十四才になった。

2 白ひげ相模庵　相模屋洋太郎
厚木町の海産物問屋相模屋。相模屋は小田原本店の他、江戸の魚河岸、大阪、四国阿波に支店を持つ大店（おおだな）である。
本店は小田原藩の城下町にあるが、本店は大番頭に任し、洋太郎は厚木町の生まれの為、小田原にはなじめず、ほとんどは厚木の支店に家族と住まいしている。
今回の一人娘　さちの急病に気も動転し、生きたここちのしない日々を送った。
この危機を救ってくれた。
道心先生、大吉先生には心の底から、感謝と、尊敬の念をいだき、人柄にも敬服し、その生き方に秘かに共鳴をし、この二人の後ろ立てになろうと、固い決心をしていた。
道心先生、大吉先生が、娘さちの看病、薬の投薬のため、相模屋に度々訪れ、薬草の話を、聞き。
「　両先生の為に、何か役にたちたい」と考え始めた。
「　そうだ、薬草を作ろう」
「　両先生にご指導をいただき、薬草を栽培しょう」
「　この地方の農民に手伝ってもらい、薬草栽培を広めよう」
「　きっと、百姓の生活の糧になるはずだ」
早速、洋太郎は道心塾を訪ね、道心先生に相談を持ちかけた。
道心は大変喜んで、その指導を快諾した。
「　薬といいましても、大変な種類があります。身近なドクダミやゲンノショウコ、キキョウ、シャクヤク等の薬草。高麗人参（朝鮮人参）」
「　また、クワ、トチノキ、キハダ、ムクゲ、等の葉や種子、樹皮、木部を使用する（薬木）」
「　その中で、一番利用される薬を選んで栽培される事をお進めいたす」
「　その指導を大吉にさせます」
「　薬草の栽培、薬の作り方、調合の仕方は大吉にさせます」
「　大吉は、大変な努力をし、十分な知識を得ました。大吉を使って下さい。」
「　はい、有難うございます。宜しく、ご指導の程お願いいたします」と頭を下げた。
相模の地で、薬草栽培が始まろうとしていた。
大吉先生は朝早く、一日おきに相模屋に通い、
薬草の栽培方法、薬の作り方、配合方法、その効能について、教えた。
相模屋からは、十人を超える若者が、近郊の農家からも、十人を超える若者が来て学んだ。
いよいよ、春が来て。薬草畑が決まり。薬草の種蒔きが始まった。皆、生き生きと仕事に励んだ。
種を蒔いてから、毎日　薬草畑に出て、その生育を見守り続けた。
「　薬草は、育ちが早いなぁ」
「　初めてだが、うまくいくと思う」
「でも、ねぇ～。高麗人参（朝鮮人参）は四年かかるそうだ」
「へえ、そんなにか・・」と。
百姓と相模屋の若者が夢をかけて，てんでに、話し、取り組んだ。
夏が来て。薬草もすくすくと育ち、葉の取り入れも始まり、小屋での乾燥作業も始まり、若者の明るい声がこだました。
秋が来て。いよいよ、実の取り入れが始まり、忙しい，期待に満ちた日々が訪れた。
「　この実は何んて言うんだ？」

「　薬草の実て、よく見ると、とてもかわいいいなぁ」
若者の他愛ない話が何時までもつづく。
相模屋洋太郎はこの薬を広く、江戸、上方、また四国にも将来は広げたいと、商人として、大きな夢をいだいていた。
薬草の製造小屋に足しげく通い、あれこれと、注文をつけていた。
「　最初だから、薬は三とおり位にしょう。頭痛に効くもの。腹痛に効くもの。風邪に効くもの。」
「　それに、名づけが、難しい・・」
「　何と、つけたらよいか？」
「　皆の衆、何か、よい名はないか」
「葛根湯（かっこんとう）はどうだ」
「何ん～だ。昔からあるじゃないか」
「　それもそうだな、わぁはは～」
「それじゃ、富山の薬は、どうだ」
「　ばか、富山の衆からおこらえるぞ」
「　ふうん、なかなか、いい名が出てこないな・・」
「それじゃ、大吉先生のお名をいただいて、大吉薬（だいきちやく）はどうじゃ」
「　いい、いい、いいじゃないか」
「　う、うん、いい、いい」
「大吉薬。これはいける」
「　どうじゃ、皆の衆！」
「　それに、決めた」と言うことで、
相模の「大吉薬」が誕生した。

大江戸での薬の販売が始まった。最初はなかなか馴染みがなく、芳しくなかったが。
「大吉」と言う名がうけた。
「　大吉の薬を飲むと、病が治るのと同時に、運勢がすごくよく成る」と言う，うわさが江戸の町々、人々にに広がり、、飛ぶように売れ始めた。
生産が間に合わなくなった。
うわさは上方にも広がり、厚木の相模屋には沢山の薬種問屋が押しかけた。
洋太郎は道心先生、に相談して、荻野山中藩の大久保お殿様に言上し、指示をあおいだ。
「　相模屋、それは誠か！よい話ではないか」
「　領民に広くいき渡らせ、薬草の栽培にあたらせよ」
「領民の暮らしが立つではないか」
「奉行を呼べ！すぐさま、道心先生、大吉先生、相模屋洋太郎と相談の上、よきにはからえ」
「　何と、よきことか。わぁはは、急げ」
と言う、お殿様のご命令で、荻野山中藩挙げての事業となった。
多くの領民が薬作りに，携わり、益々、大吉薬は有名になっていった。
ある日こと。お城からお呼び出しがかかった。
「急ぎ、道心先生、大吉先生、相模屋洋太郎共々，登城せよ。」と御達しがあり、三人は揃ってお城に向かった。
、陣屋に着くと、直ぐに、大広間に通うされた。暫らくすると、大久保の殿様がお出ましになった。
「　よう、来られた。」
「　領民の為に、おぬし達の日々の努力、有難いと思っておるぞ」
「さて、今日、来てもらったのは、他でもない、おぬし達の今日までの、努力に報いたいと思うてな」
「　はあ、はあ～、勿体無い御言葉、有難き幸せにございまする」と僧道心が答えた。
「　さて、大吉、相模屋洋太郎。両名の名字帯刀を許す」
「　大吉には士分を与える」
「　大吉の名字は、道心先生、どうか、よき名を考えて下され」
「　道心先生は僧籍にある御方ですので、藩の教授方をお願いいたす」
「　どうか、領民の為、頼むぞ」
「　はあ、はあ～有難く、お受け申しあげます」
大吉、緊張のあまり、大久保の殿が退席したのちも、暫し、呆然として座り続けていた。
陣屋からの帰り路。
「　大吉、よき名を拙僧が考えて、進ぜよう」
「先生。本当に私みたいな者がお受けして良いのでしょうか？」
「　わはははは、よい、よい、これからの為にな。よい、よい、わはははは・・」
「　相模屋殿、お主の名を考えておこう。わはははは、よきこと、よきこと」
「　これだから、人生は面白いわはははは～」
それから数日後。
大吉、相模屋洋太郎、うち揃って、道心塾を訪ねた。
「　さあ、座りなされ、よき名を考えましたぞ！」
「　まず、大吉。お主の名は」と言って、座り机の上に半紙を置き、さらさらと名を記した。
「　どうじゃ。この名は」

「　慈恩（じおん）と読む」
「ええ、慈恩ですか・・・」
「　そうじぁ、慈恩じゃ、慈悲の心を持って、人と接し。天の恩、自然の恩を常に感じ、敬うと言う事じゃ」
「また、昔の偉いお坊様で慈恩太子といわれた方、多くの著書を持ち「百本の疏主、百本の論師」と称された方がいらっしゃった。その尊いお名を頂いた。」
「　わあ、ああ、ああ。そんな偉い方ですか！」
「　そうじゃ、慈恩じゃ。」
「　先生、それはおそれ多い。とても無理です。」
「　わははは、何を言う、お主は天の子じゃ。何もおそれ多い事などない」
「　受けよ！」
「　は、は、は～」
「　慈恩　大吉。良き名じゃ。良き名じゃ」
「　さて、洋太郎殿。お前様の名は、観空（かんくう）とした」
「　常に、正しい目で、広く、大きく、空を仰ぎ見るように、人々に接する」と言う意味じゃ。
「洋太郎殿の商い。商人の道に生かしてもらいたい」
「　はい。有難うございます。」
「立派な名に恥じぬように、商人道に励みまする」
慈恩　大吉。
時代と言う大きな風が、もうすぐ吹こうとしていた。

3
白ひげ相模庵　相模屋　さち
さちとはなは同じ年の九才であり、遊び友達としては、とても気があった。
かっては、一百姓であったが、大吉の活躍により、いまでは名字帯刀を許され、慈恩（じおん）と名のり、道心塾のお手伝いと学問を懸命に努めている毎日を送っていた。
またさちも相模屋の屋号のみであったが、相模屋洋太郎が認められ、同じく名字帯刀を許され、観空（かんく）さちと名のつている。
ある日の事である。いつものように道心塾の帰りに相模屋を訪ね、さちと会い、さちの部屋で話をしていた。
すると、店頭のほうから、何やら、騒がしく、大きな声が聞こえて来た。
二人が目を合わせ、何事かと、耳を澄ました。
「何かしら？　外が騒がしいこと」
　「　本当に、何かしら？」
店の番頭さんや、手代の大きな声が聞こえた。すると慌しく、手代の宗助が飛んで来た。
「　お嬢様、今、外で騒ぎになっております。どうか、部屋から、お出になりませんように」
「　どうしたの、宗助」
「　はい、二人の酔った侍が丁稚の辰吉どんが、撒いた水がかかったと、いやがらせをし、因縁をつけ、主人を出せと騒いでおります」
「そう、怖いわ」
「本当に、心配」
ちょうど、そこへ、久しぶりに、道心先生と大吉先生が相模屋のさちの診察、挨拶の為、店を訪れたところであった。
頬のこけた、目つきの鋭い、侍が抜刀した。
「　主人が出て来ないのであれば、やむをえん、この丁稚の素首を刎ねてくれよう」
もう一人の浪人者も、いきおいづいた

「　挨拶の仕方も知らない、店主に、教えてやる」
「　首、胴を二っにして、店頭に晒してやる」
今まさに、丁稚の辰吉の首筋に、刀をつけようとした時。
すると、音もなく，道心先生が動いた。
左手で、抜刀した浪人者の刀を押しやり、右手で首筋を手刀打ちを入れた。
「　う、う～」と呻き声をあげ、浪人者は吹っ飛んだ。
慌てて、もう一人の浪人者が抜刀しょうとしたが、するっと
道心先生は内懐に入り、抜きかけた、刀を押さえ、顔面の人中を一撃きした。
「　ぐしゃ」、鼻の折れる音がして、後ろに崩れるように、吹っ飛んだ。
道心先生、僧として、全国行脚の中、会得した「　唐手」である。
周りで見ていた、衆から「やん、やぁ」の大喝采が起こった。
相模屋の番頭、吉太郎があわてて、出できてた。
「　危ないところ、お助けいただき、有難うございます」
続いて、奥から相模屋洋太郎がでできた。
「　先生、本当に有難うございました。助かりました」
「　さぁ、さぁ、どうぞ、奥へ、お通り下さい」
「　大吉先生も、どうぞ、どうぞ」
相模屋洋太郎が「　誰か、すぐに、宿場のお役人を呼んで来なさい」
二人は縄で縛られて、道端に転がされていた。まだ、気絶したままである。
奥庭に面した、洋太郎が住まいする、奥座敷に通された。
よく手入れがされた、気持ちの良い庭が広がっている。

お茶が振る舞われた。
さて、「さち殿はいかがで、ございますか」
「　はぁ、お陰さまで、あれ以来、元の元気をとり戻し、息災に暮らして、おります」
「　番頭さん、さちを呼んで、来て下さい」
「は、畏まりました」
まもなく、さちお嬢様と大吉の妹、はなが、連れ立って入って来た。
「両先生、本日は、危ないところ、お助けいただきまして、有難うございました」とさちが、挨拶をした。
「どうじゃな、お加減は」
「お蔭様で、すこぶる、元気です。体調も大変よいです」
「　それは，上々、よき事」
すると、大吉が妹、はなに顔を向けた。
「　はな、来てたのか」
「　はい、道心塾の帰りに，立ち寄りました」
「さち殿と、楽しい一時を過ごしていました」
「は、は、はぁ・・」
大吉が楽しげに笑った。
さちが眩しげに、大吉を見つめていた。
改まって、道心先生が洋太郎に向き合った。
「さて、皆様方、大吉のことですが、医術の修行に行かせたいと思いまして、ご挨拶に伺いました」
一瞬、さちの顔が青ざめた。
「　え、え、本当ですか」
洋太郎が咳きばらいをして、さちをたしなめた。
「そして、どちらに参りますか」
「　やはり、医術を学ぶのであれば、長崎だと思います」
「え、長崎ですか」
さちがじっと、大吉の顔を見つめていた。
「何時、出立つですか」
「なるべく、早く、行かそうと思う」
「それで、何年位、行かれるのですか？」
洋太郎が大吉に話かけた。
「　そう、修行次第じゃが、五，六年はかかるじゃろう」と道心先生は答えた
「旅の手配は万事、この洋太郎にお任せ下さい」
「長崎には、懇意にしている、お店があります」
「船の手配も、全て、私にお任せ下さい」
「よろしく、お願いいたします」
大吉の長崎ゆきが決まった。
さちは激しい胸の鼓動が止まらなかった。
さちの初恋であった。

白ひげ相模庵　大吉の留学　大阪①

大吉は十五才になった。いよいよ長崎への旅立ちの日を向かえた。
大久保のお殿様の計らいで、幕府の長崎奉行の役人、オランダ通詞見習いとして、出島に行く事に決まった。
平塚港から相模屋の船に乗せてもらい、大阪まで行きそのあと、長崎行きの船に乗る、長旅である。
平塚の港には、道心塾の塾生、世話になった
百姓、町民、そして、相模屋の洋太郎夫婦、さち、大吉の妹、はな、沢山の人が見送った。
さちは、妻田薬師のお守りを大吉に手渡した。
「　大吉先生、どうかご無事で、学問にお励み下さい」
「　たまに、便りを下さい」
「ありがとう、一生懸命、励んできます」
「　必ず、便りを出します」
「きっと、ですよ」
船頭から、声がかかった、
「　さぁ、乗船してくだされ」
「それでは、道心先生、いってまいります」
「堅固でな」
「大吉先生、どうかお元気で」
皆の衆に見送られ船上に立った。
大きく、大吉は手を振る。船は少しずつ、港を離れてゆく。
さちは、大きく手を振り、船影が小さくなるまで、じっと見送った。
さちの目から、涙がきらりと光るのを、洋太郎は見ていた。
船は一旦、小田原に立ち寄り、一路、大阪を目指した。
十日あまりで、無事、大阪に着いた。
港には、相模屋の大阪支店の番頭、忠平が迎えに来ていた。
水の都と呼ばれている大阪は、町中を北は土佐堀川、東西は東横堀川、西横堀皮、南は長堀川に囲まれており、縦横に運河がはしっていた。
「あぁ、大阪に着いた」
「　相模の国しか、知らない、田舎者が、あぁ、よく来た」
「　さぁ、参りましょう、大吉先生」
「厚木の主人、相模屋洋太郎から早飛脚をもらい、万事、心得ております」
「さぁ、この屋根船に乗って下され。お店のある道修町にまいります」
大吉を乗せた屋根船が静かに動き始めた。
川の流れにのり、幾筋の運河を通り、道修町に着いた。
道修町は薬種を扱う問屋が、軒をつなれている。
「　さぁ、大吉先生、降りて下さい」
「ここら一帯が、薬種問屋街です。先生のお名をとった、大吉薬も大阪でも、すでに評判で、売れてはじめています」
「　先生の大吉薬が出てから、ここ道修町に薬種専門の別店をだしました」
「そうですか。それは驚きました」

「さぁ、さぁ、ご案内いたします」
すでに、大阪でも「大吉薬」の評判は上々で販路が広がり始めていた。
相模屋の新しい　別店は道修町の表通りに面しており、間口十間、奥行き二十間、裏は
背割り下水が引かれた、堂々として、佇まいであった。
「　おいでやす」「おいでやす」と店内の奉公人から声が係り、大吉は奥に通おされた。
「さぁ、お疲れでしょう。離れにすぐご案内いたします。暫時、お休み下さい」
「造作をおかけいたします」
長崎に向かう、途中、大阪での遊学であった。
翌朝、丁稚の余吉が、起こしにきた。
「　大吉先生、手ぬぐいをお持ちいたしました。顔を洗いましたら、朝餉（あさげ）においで下さい」
「今日の朝餉（あさげ）は、いわしの塩焼き、梅干，香の物、だいこんのみそ汁でございます」
「　それは、かたじけない」
「　船の中では、あまり食欲がなかっただけに、大変ありがたい」
井戸で顔を洗い、大勢の奉公人が食事をする板の間に通おされた。
番頭、忠平が皆に大吉を紹介した。
「こちらに、いらっしゃるのが、大吉薬の生みの親、大吉先生じゃ、みな、よく先生の面倒をみるようになぁ」
大吉が頭を下げる。
「宜しく、お願いいたします」
「　さぁ、さ、先生、こちらに御かけ下さい」
「船旅では、なかなか、食事も満足ではなかったでしょう」
「奉公人と一緒で申し訳ございませんが、どうぞ、お食べ下さい」
「はぁ、かたじけない。遠慮なく、いただきます」
久しぶりの，岡に上がっての、朝餉（あさげ）安堵感と、ゆれない食事のありがたみを感じた。
「さて、先生、大阪で、どちらに行かれたいですか」
「どちらか、決めて、いますか」
「はい、できれば、緒方洪庵先生にお会いいたしたいと思っています」
「え、適塾の洪庵先生ですか」
「はい、ぜひ、お目にかかりたい」
「さようでございますか」
「　丁度、手前どもは適塾とは、お取引がございます」
「私が行って、お話いたしましょう」
「それは、有難い、ぜひ、お願いいたします」
「畏まりました。おまかせ下さい」

緒方洪庵は天保九年、大阪瓦町に蘭学塾、適塾を開設し、多くの門弟を集め、二年後には、一戸建ての家を買いとり過書町に移りっていた。
適塾の教育は独特のもので、五日ごとに開かれる、蘭書の和訳、討論を取り入れた、当時としては、画期的な教育方針であった。
鎖国で外国の文化、情報が入らない、日本あって、西洋文化に触れられる、貴重な場であった。
「早速、今日でも、適塾にまいり、洪庵先生にお目にかかりましょう」
「それは、ありがたい、何分、宜しくお願いいたす」
「おまかせ下さい」
夕刻、番頭の忠平が戻ってきた。
すぐに、離れの大吉を訪ねた。
「　先生、お喜び下さい。」
「　洪庵先生にお許しをいただきました」
「洪庵先生も大吉先生の評判を知っていました」
「ぜひ、おいで下さいとの事です」
「それは、有難い。本当に有難うございました」
「ようございました。私も、ほっと、いたしました」
「　本当にご動作を、おかけいたしました」
翌朝、番頭の忠平の案内で、適塾の緒方洪庵を訪ねた。
玄関で待ちうける者がいた。
「　大吉先生ですか」
「はい、相模の国からまいりました、慈恩大吉でございます」
「これは、ご挨拶，いたみいります」
「　手前は、村田　蔵六でございます」
のちの、維新の軍事の立役者、大村益次郎であった。
「どうぞ、お上がり下さい。先生がお待ちでございます」
「はぁ、お願いつかまつる」
大吉と番頭の忠平は洪庵の居間に通おされた。
　襖を開けると、洪庵がすでに、座っており、にこやかに微笑み、大吉を見つめた。
「　さぁ、さぁ、どうぞ、お座りくだされ。」
「　はぁ、では、失礼つかまつる」
「　先生、昨日、お話申し上げました、大吉先生でございます」
「　はぁ、相模の国から、まいりました、慈恩大吉でございます」
正座して、洪庵先生に丁重に挨拶をした。
「　大吉薬の評判この上方にも広がっており、大変、興味があります」
「　こんなに、お若いとは思ってもいませんでした」
「未熟者でございますが、どうか、先生のお教えをいただきたいと思い、お訪ね申し上げました」
「よくぞ、お訪ねいただいた」
「聞くところによると、長崎の蘭語の通詞身習いに行かれるとの事」
「　誠に、羨ましいかぎりじゃ」
「なかなか、限られた、幕府関係者以外は、出島には入れない」
「直接、オランダ人と接触して、話が出来るのはごく、少数の限られた役人だけじゃ」

「　この機会を大事にされよ」
「　はぁ、有難い、お言葉、肝に命じます」
「　大吉殿の薬草の知識、この塾の生徒にも教えて下され」
「　して、この大阪にどの位、滞在される」
「はぁ、十日あまりだと、思います」
「次の長崎行きの船が出るまででございます」
「さようか、ちと、短いな」
「ところで、大吉殿、蘭語はお解りかな」
「いいえ、見たことも、聞いたことも、ありません」
「　わは、は、は、は　それはいい」
「かえって、なまじ，かじって、いるより、真っ白のほうが、早く上達するものじゃよ」
「さて、蔵六。あれを持ってきなさい」
「はい、畏まりました」
しばらすると、蔵六が分厚い、重そうな、一冊の本を持ってきた。
洪庵が大吉の膝の前に置いた。
「　これを見たことがありますか」
「いいえ、見たことはありません」
「これは、蘭学を志す者にとっては、命の次に大事なものです」
「これは何ですか」
し～ん、とした、室内一瞬に張り詰め、大吉は見詰めた。
洪庵が静かに語った。
「これが、ドゥーフ・ハルマです」
「・・・」